仙台北三番丁教会
2023 年 4 月 9 日 復活祭礼拝説教

復 活

牧師 齋藤 朗子

聖書 マルコによる福音書 16 章 1～8 節
1安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料
を買った。
2そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。
3彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。
4ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。
5墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。
6若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの
方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。
7さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かね
て言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」
8婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐
ろしかったからである。

私たちは、普段の何気ない会話の中で「復活」という言葉を使って、ある状態を言い表すことがあるかと思いますが、それは通常、人や物が「回復」「完治」「立ち直り」「前進」といった状態を指して用いられることと思います。そして、何かが「復活した」と言う時には、「復活」の前に、その人や物が壊れていたり、痛んでいたり、停止したりしていた状態であったことがわかります。

しかし、ナザレのイエスのご復活は、単純に、壊れたり、痛んだり、停止・停滞していた状態が終了し、好ましい状態になってよかったね、というだけの話ではありません。まず、イエスの復活は、死者がよみがえるという、神さまの領域で起きた神秘の出来事でした。それを告げられた人々は、恐ろしくなって震えあがり、信じることができなかった、そのような奇蹟です。本日は仙台宮城野教会でも墓前礼拝がささげられ、同時に篤牧師の父の納骨式も行われますが、仮に、お墓に骨壺を納めた3日後に、義父がよみがえって教会に現れたとしたら、私はぞーっとして怖くてその姿を直視できずに、悲鳴をあげて逃げてしまうと思います。空の墓を見た人々はそういう体験をしたのだと想像します。

しかし、イエスの復活は、恐怖で終わるホラー映画ではなく、信じた人々をもとの状態に回復させるどころか、愛と平和への道に目覚めさせ、その後の生き方までも変えてしまう恵みに満ちた偉大な力があります。イエスの復活の力は、死んだように生きる者を生まれ変わらせ、閉じていた者を開き、止まっていた者を前進させます。イエスの復活は、人にとって生きる力なのです。

少しだけ自己紹介を兼ねて私自身の話をしますが、私は実は、いま話題の（？）「カルト宗教2世」です。中学を卒業するまで、母親が入信している宗教の活動に強制的に参加させられ、学ばされ、その宗教の多くの掟にしばられ、人間ではなくロボットのように扱われ、彼らの持つ歪んだ神観、世界観、人間観、死生観に強い影響を受けました。

この環境から逃げ出したあと、私は自分のことも、世界のことも、どうしたら自由に幸せに生きることができるのかもわからないまま、長い時を過ごしました。その間、私を生かしたのは、「異様な」宗教団体の存在と、理不尽な人生に対する怒りと憎しみと悲しみでした。私は、これらの負の感情が自分の生きる原動力になっている状態にあまりにも慣れ過ぎて、自由や幸せを求めて歩むための数々のアドバイスや助けの手を無視し続けました。

しかし、暗く、汚く、淀んだ冷たい沼に身を沈めて、出てこようとしない私を救い出してくださったのは、イエス・キリストでした。イエス・キリストは、私に「愛」や「平和」や「公正」、ひいては「自由」や「人の尊厳」「人権」のことまで私に教えてくださいました。これらは長い間、私の人生にはまったく馴染みがなかっただけでなく、あまりにも眩しく、美し過ぎて直視できず、それらがもつ温度に恐怖すら感じてきたものでしたが、天使たちや復活のイエス・キリストが私にかけてくださる「驚くな」「恐れるな」というみことばに支えられながら、ひとつひとつ、知り、考え、味わう幸いの道へと導かれて、いまがあります。

本日朗読した（された）マルコ福音書は、イエスの復活を知らされた人々（マルコでは3人の女性）は、恐怖で正気を失い、何も言えなかったところで終わっていますが、そのほかの福音書をあわせ読むと、イエスの復活が、なぜイエスと共に歩んできた人々、とくに 11 人の弟子たちが立ち直り、新たに生き始めた力となったのかを教えられます。特に、ヨハネ福音書が書き残した、ティベリアス湖（＝ガリラヤ湖）湖畔での、弟子たちと復活されたイエスとの交わりは、深い感動をわたしたちにもたらします。

ペトロとトマス、ナタナエル、ヤコブとヨハネ、そのほかの2人の、おそらくみなガリラヤ地方出身である弟子たちは、イエスが死に、墓に葬られたあと、かつて自分たちが慣れ親しんだ環境に引きこもりました。湖のゆるい波が岸でたぷたぷと音を立て、子どもの頃から見慣れた風景が目の前に広がっています。
ペトロにとって、イエスと歩んだ3年余りの時間は夢のようでした。しかしいま、「現実」に戻って、過去の自分に、つまり、一介の漁師であるにすぎない自分に引きこもります。一緒にいたほかの弟子たちも同じような心境だったでしょう。彼らの人生は、イエスの死によって倒れ、停滞し、ガリラヤに沈みました。イエスを捨てたことへの後悔、恥ずかしさ、そしてイエスに対する疑念の沼に、空虚な心で網を投げたところで、そこからなにも得るものはありませんでした。

人は、それが自分にとってどんなにつらい、嫌な状態であったとしても、自分にとって「慣れ親しんだ」環境や状況や心理状態に、ある種の安心感を抱く傾向があります。そして、そこから出てこようとしない、変わろうとしない、ある種の「かたくなさ」（マルコ 16:14）を示すことも、決してめずらしいことではありません。

ところが、復活されたイエスは、彼らがかたくなに引きこもり、沈んでしまったその場所にやってこられます。穏やかさと落ち着きと、言葉では形容しがたい、無視し切れない愛と説得力を持って、過去の場所、過去の自分に引きこもり、沈み切った弟子たちを、ご自分の光の中に救い出されました。暗さと光、陰と陽が相まみえるところでこそ、光の光たることが証明され、確信され、「陽」の能動性、積極性が遺憾なく発揮され、闇に勝つのです。
私たちが、イエスの復活を「信じる」とは、このようなことではないかと思うのです。もはや知らぬふりができない愛、人をなにかの道具ではなく神の似姿たる人に変えて生かす愛、
自分が喜ぶのみならず、すべての人に知って欲しくなる愛、祝福と平和に満ちた愛に、我が身をゆだねるところで、私たちも絶えず「復活」させていただくのです。「わたしを愛するか」と、愛に迫られて、切なさのあまりに、ペトロのように「私のあなたへの愛を、あなたはご存じのはずです」と言うのです。

人は誰しも、それぞれ重いものを抱えて、時には抱えきれずに押しつぶされて、自分を見失い、希望を失うものでしょう。イエス様の光すら疎ましく思える闇に、目も心も馴染み切ってしまう時もあるでしょう。しかし、その闇にも主イエス・キリストはやって来られます。光が見えない時でも、光は「ある」と確信すること。復活された主が私たちの生きる力の源であること。今日からまた新たに、愛と憐れみの神がわたしたちに授けてくださった復活信仰を生きさせていただきましょう。

祈り

神さま、ご復活なさったイエス・キリストに私たちを出会わせてくださり、導いてくださったこれまでの日々を思い起こし、感謝と賛美をおささげいたします。復活を信じるわたしたちは、このイースターの朝に、「光などない」という世界に遣わされようとしています。どうか主よ、あたらしい一週間も、変わらず私たちと共にいてくださり、あなたのご復活がわたしたちに与えて下さる愛と赦しと平和を伝える使者としてお用いください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。